

他教科と連携した授業実践のあり方について

～英語と世界史のコラボレーション授業～

市立高崎経済大学附属高等学校

地歴科教諭

長岡将之

英語科教諭

内田三和

1 問題の所在

高校は学ぶ内容がより高度化・専門化・系統化することが特徴である。その反面、系統化によって他の教科との連関性、連携がなくなってしまうという問題がある。そのため、ある内容を2つ以上の教科が別々に教えるなど、非効率的になりがちである。生徒も教科間のつながりをあまり意識できておらず、それぞれの教科・科目は独立していると考えている傾向が強い。また、大学受験を視野に入れる本校の生徒は、受験に関係のない科目は学ぶ必要がないと考えている傾向がある。よって、普段の授業で以下のような光景がよく見られる。例えば、漢文の授業で国語の教員が生徒達に向かって「孔子は世界史で習っただろう？」と質問するが、生徒達は世界史で孔子を習っていても無反応かまたは答えられないで、教員も「まだ習っていないのか」と結局国語の先生が孔子について説明をする、といった光景である。

しかし、現実には各教科の背景にあるものを知っておいた方が多い場合が多い。例えば、現代文の論説文や英文の内容が現代社会の内容であれば、それに関係する科目の知識がないと文章を読み取れないという事態が起きる。本校の場合を見ても、英語を教えていて、背景の知識がないため英文を読めない(単語や文法を駆使して訳しても日本語訳がわからない、背景がわかっていないので推測して読むことができない)という生徒がとても多い。また、そもそも受験に関係なく、諸学問はそれぞれが関連を持って繋がっており、総合的な学力や考える力を身に付けさせるという点から考えると、文・理系関係なく様々な知識を身に付ける必要がある。また、本校には英語に興味を持っていて、将来英語を使った職業に就きたいと考えている生徒も多い。しかし、中には「英語」さえできればいいと考えている生徒もいる。英語力も大事だがその英語力で語るべき内容を持たなければ他国の人から認められる人間にはならないとよく言われる。よって、様々な教科で身につける知識や考える力が「語るべき内容」になるのだと生徒に実感してほしいし、総合的な力を身につけてほしいと考えている。

このような問題意識から、これらを解消するためには、例えば英語と地歴科といった教科同士で連携し、様々な教科が繋がっていると生徒に認識させる必要があると考えた。それぞれの教科が関係していることを実感すれば、生徒は受験や文・理系に関係なく様々な教科を学んだ方が良く思うようになり、総合的な力を身につけていくことができるのではないかと考えた。そのような変化により、本校において生徒が簡単に受験科目を減らしていくことも防ぐことができ、国公立大学受験者数も多くすることができるのではないかと考えている。

以上のような問題を解決する一つの方法として、英語と世界史で連携・連続した授業、いわゆるコラボレーション授業をおこなう。歴史の内容を含んだ英文を学習する授業の前に、その英文に書かれた歴史の内容部分について「世界史」の授業をおこなう。そして、比較するために英文を読む前に背景知識を学ぶことができる「世界史 英語」と授業を受けるクラスと、背景知識を学ばずに英文を読む「英語 世界史」と授業を受けるクラスをつくり、それぞれ英語の授業後にアンケートを実施する。このことによって、生徒の意識の変化や他教科間の連携の大切さというものを生徒がどう感じるか検証したい。

2 生徒の実態

研究授業をおこなうのは、2年4, 5組で理系のクラスである。

世界史は、本校のカリキュラムで世界史Bを1年次から引き続き2単位の授業がある。この2クラスの中で世界史Bを受験科目として考えている生徒は4名程度で非常に少なく、裏返すとほとんどの生徒が世界史を受験科目として使わない。しかし、半分から8割くらいの生徒は熱心に授業に取り組んでいる。その反面、残りの生徒は「苦手である」「受験科目でない」「好きでない」といった理由から授業の取り組みがあまり良くない。また、文系の生徒に比べて考査の平均点が15点以上低く、知識の理解度が低い。それは、授業に対する全体的な取り組みの差であるとも言える。

英語で今回の研究授業の対象となるのは2年4, 5組の習熟度上級クラスである。授業への取り組みは真面目で、常に9割以上の生徒が予習をして授業に臨んでいる。これは評価できる点ではあるが、その一方で、機械的に辞書で意味を調べて予習ノートを完成させていたり、文全体を読まずに指定された重要文だけ意味を考えている可能性もある。また、文系の上級クラスと比べると、難しい文や問題に対しては諦めてしまう様子が見られ、定期考査でもクラス平均が常に5~6点低くなっている。これらの実態を改善するために、自分で内容を推測しながら英文を読めるように指導する必要がある。

また、「英語 世界史」の順で授業を受けるクラスは2年2, 3組の文系クラスである。世界史を受験で使用する文系の生徒は半数を超え、英語に対しても興味があり、得意意識を持っている生徒が多い。なお、2年2, 3組の英語の授業は11月7日(金)に実施し、授業後にアンケートをとった。2年2, 3組の世界史の授業は翌週の11月11日(火)におこなった。

表1 研究対象のクラスと授業日

世界史 英語			英語 世界史		
	世界史	英語		英語	世界史
2-4	11/12(水)1限	11/12(水)2限	2-2	11/7(金)6限	11/11(火)4限
2-5	11/10(月)1限	11/12(水)2限	2-3	11/7(金)6限	11/11(火)5限

斜体字は研究授業

3 研究授業

世界史

- (1)日時 平成20年11月12日(水) 1限
- (2)クラス 2年4組(40名)
- (3)使用教材
 - ・教科書『詳説世界史B』(山川出版社)
 - ・副教材『最新世界史図説タペストリー』
 - ・プリント
 - ・音楽CD
- (4)授業テーマ 1950年代から70年代のアメリカ現代史~黒人差別撤廃運動、ベトナム戦争を中心に~
- (5)本時の目標

1950~70年代におけるアメリカの歴史、特に黒人差別撤廃運動、ベトナム戦争について理解する。

1950~70年代におけるアメリカ社会の雰囲気や当時の音楽を聴くことを通して、イメージすることができる。

(6)授業の留意点

今回の世界史は次の英語授業への補助的役割なので、知識が深くなりすぎたり、知識を詰め込みすぎたりしないように注意する。

また、教材として音楽を聴かせる点であるが、今の高校生にとって音楽は日常であり、音楽は彼らの生活のBGM(バックグラウンドミュージック)となっている。つまり、この曲を聴くとあの時を思い出すというように。こういった実態から、その時代にあった音楽をかけることによってイメージが残りやすいのではないかと考えた。そして、今回の世界史の授業が次の英語の授業で英文を読む際の「バックグラウンド」として出てきてくれればということも狙っている。

(7)世界史指導案

段階	時間	学習内容および活動	指導上の留意点	評価の観点
導入	10分	<ul style="list-style-type: none">・ 今月アメリカ大統領選挙で次期大統領に当選したオバマ氏についての質問に答える。・ 黒人についての歴史的知識(「現在アメリカ合衆国の人口に占める黒人の割合」、「なぜアメリカに黒人がいるのか」など)についての質問に答える。その後、その歴史について確認する。	<ul style="list-style-type: none">・ 身近な時事問題から入り、過去と現在が線で繋がっていることを実感させる。・ 生徒の感覚で答えさせ、生徒の感覚と正解とのズレを認識させる。	<ul style="list-style-type: none">興味・関心知識・理解知識・理解
展開	35分	<ul style="list-style-type: none">・ 戦後のアメリカを50年代、60年代で分け、その時代の音楽を聴き、大まかなイメージを作る。音楽は黒人のチャック=ベリー、白人のエルヴィス=プレスリーを聴き、法や政治ではなく音楽から白人と黒人が融合していったことを理解する。・ 50年代後半から、公民権運動が高まったことを理解する。・ アフリカの年に独立したアフリカ諸国を資料集から調べ、発表する。・ 公民権法について理解する。・ 60年代前半のイメージとしてビートルズの曲を聴く。・ ベトナム戦争の説明を聞き、概要を理解する。・ 反戦運動の一つであるジョン=レノンの曲を聴き、反戦運動と当時の若者のス	<ul style="list-style-type: none">・ 音楽はあくまで補助的な教材として用い、あまり深く説明しないよう注意する。・ 資料集から読み取らせる。・ 法的には平等になっても、心理的差別は残っていることも付け加える。・ 時間の関係や今回のコンセプトからあまり細かい説明はせず、大枠がイメージできるように説明にする。	<ul style="list-style-type: none">興味・関心知識・理解知識・理解資料活用知識・理解興味・関心知識・理解

		タイトルをイメージする。		
ま と め	5 分	・今日の授業のまとめを聞く。		

英語

(1)日時 平成 20 年 11 月 12 日(水) 2 限

(2)クラス 2 年 4 , 5 組の習熟度上級クラス (31 名) 2 年 5 組教室

(3)使用教材 ・教科書 Unicorn English Course II (文英堂)
・プリント

(4)本時の学習範囲及びテーマ

・教科書 Lesson 4 “ Fashion - A Reflection of the Times ” Part 2

ファッションは時代を映す鏡であるということをテーマに、1950 年代から現在までのファッションと各時代を概観する文章である。本時は 1960 年代の時代背景とファッションについて読む。

(5)本時の目標

英語のリーディングやリスニング活動において、背景知識を使うことが有効だと実感する。

文章の流れ、特に General - Particular (一般、抽象的なものから具体例へ) のパターンを意識して読むことにより情報を整理し、このパターンで英文を書く。

(6)授業の留意点

本課前半に関しては「背景知識を利用して類推しながら読む」という目標のため、予習を求めず、その場で類推しながら読む活動を中心としている。

世界史の授業で先に内容を学習していることに加え、本時の学習範囲では新出文法事項もないので、説明は最小限にとどめ、4 技能を使った活動を十分に行いたい。

(7)英語 指導案 (L=Listening; S=Speaking; R=Reading; W=Writing)

段階	時間	学習内容および活動	指導上の留意点	評価の観点
導入	10分	Oral Introduction (L, S, W) ・ John Lennon に関する英文を聞きながらメモを取る。 ・ メモを元に John についてペアで話す。	・ 授業開始時に音楽を流し、学習する時代の雰囲気を作る。 ・ 既習の表現を使って英語で導入する。 ・ 時系列に沿ってメモを取らせる。	興味・関心 技能・表現
展開	8分	STEP 1 (R) ・ 背景知識や文脈により、未知語を推測しながら読む。	・ 辞書に頼らず読ませる。	技能・表現
	12分	Words & Grammar ・ 新出単語、熟語の意味を含め、ポイントとなる文の訳を確認する。	・ 重要表現や指示語が表す内容に注意させる。	知識・理解
	5分	STEP 2 (R) ・ 文章構造 (General-Particular) を確認する。	・ 1 文単位の読みから、段落単位の読みを意識させる。	知識・理解

	10分	STEP 3 (W) ・背景知識を活用し、G-P パターンを使って文章を膨らませる。 ・書いたものをペアで読みあう。	・例を表す談話標識の使い方に注意させる。	技能・表現
まとめ	5分	・今日の授業のまとめを聞く。	・ポイントのまとめと次時の予告を行う。	

4 世界史、英語の学習分析と生徒へのアンケート

2年4, 5組の生徒と2, 3組の生徒とも英語の授業内で英作文などの学習活動を行った。また、4, 5組では、世界史、英語の研究授業を受けた後にアンケートをとった。2, 3組では英語の授業の後にアンケートをとった。つまり、2, 3組の生徒に対しては世界史の授業を受ける前にアンケートを実施した。

世界史の授業評価

4, 5組の英語の授業を受けた生徒に「今回の世界史授業の内容を理解できましたか」というアンケートをおこなったところ、31人中27人、87%が「とてもそう思う」「そう思う」と答えた。

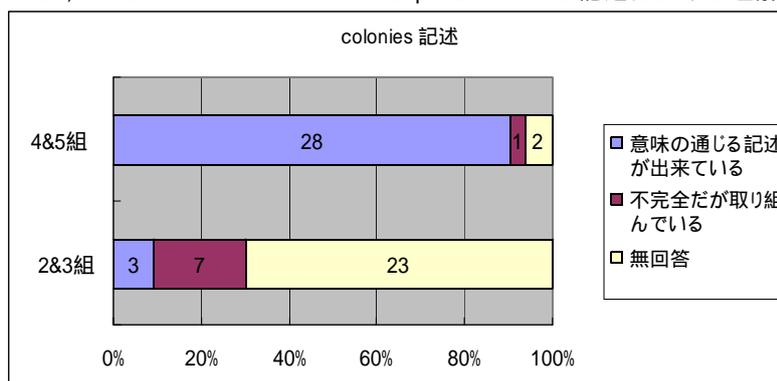
英語の学習分析

授業で学習したことを発展させる活動として、教科書文中で指定した6つの語句のうち1つ以上を選び、その語句に具体例やより詳細な説明などを加えることで、文章を膨らませる活動を行った。これは、4, 5組の生徒と2, 3組の生徒、どちらのクラスでも初めて行う活動であった。

授業後のアンケート結果によると、この活動が「とてもよく出来た」または「よく出来た」と答えた生徒は、両クラスともに20%前後と少なく、差がない。しかし「全く出来なかった」あるいは「あまり出来なかった」と答えた生徒の割合を比べると、2, 3組が合わせて42%と4, 5組の22%を上回る結果となった。

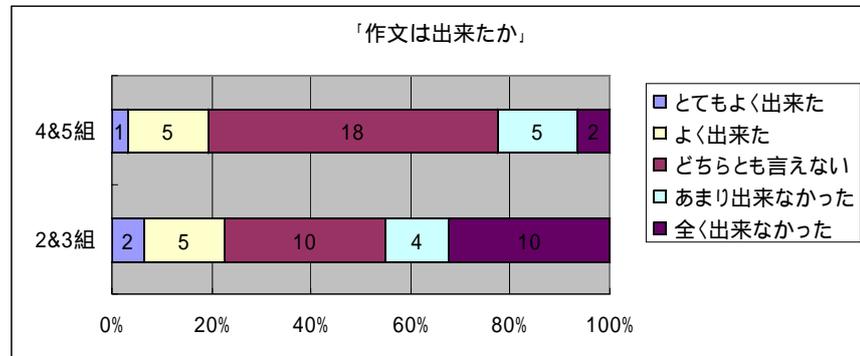
6つの語句についての生徒の記述を「意味の通じる記述が出来ている」、「不完全だが取り組んでいる」、「手をつけていない」の3段階に分けて分析した。6つの語句全てについて2, 3組の生徒はほとんど手をつけることが出来なかった。差が最も顕著であったのは、“In Africa, a lot of colonies won independence.”の文について(図1)で、4, 5組の生徒のうち90%が、“such as ~”や“For example ~”と例を挙げるパターンを使い、世界史の授業で得た知識を生かして、どの国が独立したのかという説明を付け加えることができた。

図1 “In Africa, a lot of colonies won independence.”の記述における理解度



また、「これらの作文（記述）が出来たか」という質問に対して、比較すると「とてもよく出来た」「よく出来た」と答えた数はほぼ同じであるが、英語の成績が良いはずの2, 3組で「全く出来なかった」と答えた生徒が多かった（図2）。

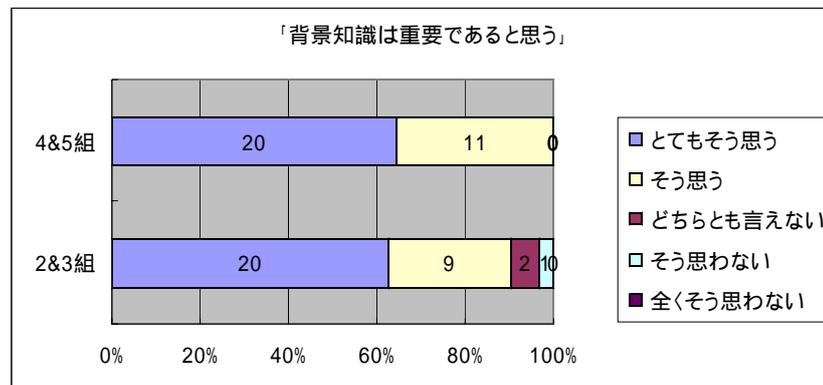
図2 「作文は出来たか」のアンケート結果



背景知識の重要性に対する認識について

「今回の授業を受けて、英文の内容に関する知識が大事であると思いましたが」というアンケートに対して、4, 5組の生徒全員が「知識が重要だと思う」という項目に対し、「とてもそう思う(65%)」「そう思う(35%)」と答えた。2, 3組では「どちらとも言えない」が2名、「そう思わない」が1名いた（図3）。世界史の授業を受けてから英語の授業を受けた4, 5組の生徒は知識の重要性について大事であるという認識になったと言える。

図3 「背景知識は重要であると思う」のアンケート結果



5 まとめ～成果と今後の課題～

生徒の感想から

合同の研究授業に対する感想(自由記述)として、4, 5組の多くの生徒が「自然に世界史での知識が英語の時に出てきて、いつもよりかなり理解しやすかった」「世界史の授業の後に同じ時代について英語で読んだのでいつもよりわかりやすかった」と答えた。中には「違う教科でもそれぞれの知識がより理解を深めるのだと思った」、「片方の授業の知識だけではだめだと思った。両方きちんとしなければいけないと思った」という感想もあった。英文を読む際の背景知識の重要性、さらには各教科の学習内容を結びつけることの重要性を今回の研究授業で感じてくれたと考える。

英語科から見た成果

英語科から見た成果として以下の2点が挙げられる。1点目は、生徒の内容理解を深められたことであり、これは良質なインプットにつながるものである。英語科の教員としては、教科書で様々な話題を扱うのは面白い反面、自分では知識に自信のない分野もある。今回のように他教科と連携することにより、生徒の内容理解も深まると感じた。村野井(2006)は、英語の上達につながる「インプット(入力)」の条件として、学習者自身の生活に関わる内容であることを挙げている。他の教科で学ぶ内容というのは、生徒の生活や興味・関心に関わる場所なので、それを英語で読んだり聞いたりすることは有効であると思われる。

2点目は、アウトプット活動の確保である。英語の習得には「インプット」だけでなく「アウトプット(出力)」が欠かせない。しかし、ただでさえリーディング活動が中心になりがちな高校の授業で、話の背景についても説明に多くの時間を割いているのであれば、「話す」、「書く」などの生徒によるアウトプット活動機会を確保することが難しくなる。他の教科で生徒が学習した知識を生かして授業を行えば、今回のようにアウトプット活動も行えるという利点がある。

世界史から見た成果

世界史から見た成果として以下の点が挙げられる。世界史の学習内容は具体的には政治、経済、文化、社会、交流の歴史である。つまり、人間の活動を学ぶので、他教科との関連は多かれ少なかれ必ずある。今回の研究授業は、それを生徒に実感してもらうために非常に有効であった。そして、実際にコラボレーション授業をやってみて他教科との連携もしやすい科目であるということがわかった。

コラボレーション授業の成果と今後の課題、可能性

冒頭で述べたように高校は教科ごとに専門性・系統性を追求していく部分が多分にあるため、現実的には他教科間のコラボレーション授業を数多くできるわけでない。逆にコラボレーション授業を多くすることにより、専門性や系統性が失われる、生徒が知識を獲得するにあたり混乱をきたすという弊害も考えられる。しかし、今回のコラボレーション授業の試みをきっかけとして、研究授業前後の職員室では「英語や現代文は他の様々な教科と合同で授業できる」「古典と日本史の組合せはどうか」などの会話があった。教員同士が他教科との連携が大事で必要であると考えられるようになったことが一つの成果であるし、英語と世界史以外のコラボレーション授業も有効であることはもちろんである。そして、教員はその意識を持って普段から授業に取り組んでいくということ、特に「生徒は他の教科でどんなことを学習しているのか」を知ることが必要である。

そのための方策として考えられるのは、「シラバスを利用し、他教科との連携・関連がある箇所の一覧、または関連図を作成すること」である。現在シラバスはどの高校も教科ごとにまとめて教務に提出し、1冊にまとめるまでしてあるが、なかなか他の教科のシラバスを見るような機会を持たないというのが現状であろう。そこでシラバスを提出する段階で、他教科と関連する単元や学習内容を各教科ごとに印をつけ、それらをまとめる係が一覧や関連図を作成する。それらを教員が見ることによって、コラボレーション授業をしなくても、例えば国語の教員が「7月にやる漢文の学習内容は6月に世界史で習うからしっかり聞いておきなさい」と具体的な指示ができ、生徒も他教科と関連しているという意識を持って普段の授業に取り組むことができるようになる。

今回の試みは、「単発」のものであり、生徒や教員への刺激という点で一定の成果があった。しかし、生徒が3年間を通じて各教科が関連して知識と知識を結びつけ総合的

な学力を身に付けていくためには、1年間または高校3年間を通して学校全体の取り組みが必要になってくる。また、生徒への成果も「点」ではなく「線」で見えていかなければ、効果があると言うことはできない。年間を通しての他教科との連携と、生徒への教育的効果の実証が今後の課題である。

教員側が他教科との連携を意識した教育活動をおこない、生徒がそれぞれの教科が関係していることを実感すれば、生徒は受験や文・理系に関係なく様々な教科を学んだ方が良く思うだろう。受験という視点で考えても、受験に必要な科目だから勉強しなくて良いと考える生徒が減り、受験科目を簡単に減らすことがなくなると考えられる。そして、本質的な教育的視点で言えば、生徒が知識と知識を結びつける力を身に付けることにもつながり、それは総合的な力を育成することになる。

最後に、この研究は個人的なところでスタートしたものであり、今回研究授業をおこなったのは私たち2人だったが、「世界史」及び「英語」の各教科担任の協力なしには実現できなかったものである。世界史は2学年の「世界史B」を2人の教員で、英語は2学年の授業「英語」を3人の教員で同時進行しているが、教科間の連携に賛同してくれ、研究授業の対象ではない他の2学年のクラスすべてに同じ時期に同じテーマの授業をおこなうことができた。また、私たちの研究授業にあたっても学校の全面的な協力があり、当日の研究授業にはそれぞれ10人以上の先生方に参観していただき、多くの批評や講評をいただいた。生徒も真剣に授業に取り組んでくれた。この場を借りて感謝を申し上げたい。

参考文献

村野井仁『第2言語習得研究から見た効果的な英語学習法・指導法』(大修館書店、2006)